

2020/12/18

## 瀬戸正人 記憶の地図 Seto Masato: Maps of Memory

2020年12月1日（火） - 2021年1月24日（日）



〈Bangkok, Hanoi [1982-1987]〉より《バンコク中央駅の裏通り、早朝》東京都写真美術館蔵

### 展覧会概要

瀬戸正人（1953-）はタイ国ウドンタニ市に、日本人の父とベトナム人の母の元に生まれ、61年に父の故郷である福島県に移り住みました。東京写真専門学校（現・東京ビジュアル・アーツ）卒業後、81年よりフリーランスの写真家として活動を始め、96年には、特異な視点で都会に生きる人々を捉えた〈Silent Mode〉、〈Living Room, Tokyo 1989-1994〉で第21回木村伊兵衛写真賞を受賞、現代日本を代表する写真家の一人として高い評価を得ています。

タイと日本を往還しながら、半世紀以上にわたりアジア各国の人々の暮らしや表情、風土や自然、社会にレンズを向けてきた瀬戸は、「写真は『記録』であると同時に『記憶』でもある」と語ります。本展で紹介する写真群は、瀬戸自身の記憶とともに、何層にも折りたたまれた「記憶の地図」となって、見る者の前に鮮やかに浮かび上がらせることでしょう。

本展は、デビュー作〈バンコク、ハノイ 1982-1987〉から最新作〈Silent Mode2020〉にいたる各時代の代表作によって、瀬戸が見たアジアを紹介します。

なお、本展は、オリンピック・パラリンピックの開催都市東京が展開する文化の祭典「Tokyo Tokyo FESTIVAL」の1つとして実施するものです。

瀬戸正人 [せと・まさと]

1953年、タイ国ウドーンタニ市に生まれる。61年に父の故郷で、福島県に移り住む。1975年、東京写真専門学校（現・東京ビジュアル・アーツ）卒業。在学中、森山大道氏の紹介で、岡田正洋写真事務所に勤務、同時に深瀬昌久氏の助手を務める。1987年自らの発表の場として、ギャラリー〈Place M〉を開設。以降、写真集『《バンコク、ハノイ》1982-1987』で日本写真協会新人賞受賞をはじめ、第21回木村伊兵衛写真賞を受賞、1999年『トオイと正人』で第12回新潮学芸賞受賞など多数。



作家近影

## 展覧会を構成する6つのセクション

### I. Bangkok, Hanoi [1982-1987]

瀬戸の生まれ故郷タイ・バンコク、そして母の親戚の住むベトナム・ハノイを約20年ぶりに訪れて撮影したシリーズ。東南アジア2大都市の街と人々を描くフォト・ドキュメントであり、作家自身のルーツをたどるパーソナル・ヒストリーでもある。

前半の「バンコク」では、市場や街路の光景のみならず、飲食店や風俗店、アパートメントの中の人々にも遠慮なくレンズを向けている。そして、バンコクの風景と匂いは眠っていた瀬戸の記憶を覚醒させた。

*1981年6月1日、僕は8歳のときに日本に来て以来20年ぶりにバンコクに帰った。何もかも覚えているのだが、言葉だけはどうしても思い出せない。焼けるアスファルトのにおいも、道端で腐りかけている犬の死骸の甘いようなにおいも覚えているのに。しかし、屋根のアセチレンの重たいにおいを吸い込みながら歩き回っていると、ある時突然、耳の奥深くに潜んでいた言葉が飛び出した。長い間眠っていた脳細胞が動き出したのである。*

瀬戸正人『《バンコク、ハノイ》1982-1987』（1989年、株式会社アイピーシー）

後半の「ハノイ」は、1983年の旧正月に撮影された瀬戸の親族たちである。親族らもまたウドーンタニに生まれそこで暮らしていたが、瀬戸が父の実家である福島に移住するのに先立ち、ハノイへ移っていた。当時、日本人のベトナム渡航は禁じられていたものの、ベトナム人の母の帰省に同行する形で入国。ハノイ市内での街路撮影は禁止されていたため、親族や近隣住人に限られたものであるが、彼らの視線は柔和でのびやかである。



左：《トンブリ地区（チャオプラヤー川の西側）のウォンウェンヤイ駅のバス停》

右：《ファンティ家の一族と母》

〈Bangkok, Hanoi [1982-1987]〉より  
東京都写真美術館蔵

## II. Living Room, Tokyo [1989-1994]

〈Living Room, Tokyo〉は、日本人を含め、アジア諸国や中近東など、様々な国と地域から東京に移り住んだ人々の居住空間を記録したシリーズで、一般的な集合住宅の中で繰り広げられる国際色豊かな東京の側面を浮き彫りにしたものである。瀬戸は東京に住むタイ人のアパートを訪れた時、外観は普通の集合住宅にも関わらず、部屋に一步入るとまさに「タイ流」の生活空間があり、その落差に驚いた。外観からはうかがい知ることができない個人の生活空間が、薄い壁一枚を挟んで連続している「部屋」という空間に強い興味を抱いたのである。

作品はすべて 8×10 インチサイズの大型カメラで撮影し、瀬戸がモデルたちに唯一依頼したことは、カメラへの視線を外すことだった。室内での撮影のため、露光時間は数秒と長く、その間モデルたちは息を止めて撮影に応じなくてはならないため、部屋の一部に配置された無個性で無表情な人形のように見える。

〈Living Room, Tokyo〉は 1995 年 1 月に開催した東京都写真美術館の総合開館記念展「写真都市 TOKYO」で、幅約 1 メートルのロール紙 1 本分に途切れることなく 18 イメージをつなぎ、絵巻物的なプリントとして展示。また、翌 96 年に刊行された写真集『部屋 Living Room, Tokyo』は各作品が蛇腹状に綴られた装丁で、同じ時代のひとつの都市に多様な文化と生活が共存していることを視覚的に再現した。

※本作品及びシリーズ「Silent Mode」により、1995 年度第 21 回木村伊兵衛写真賞を受賞。



左：《手前：フレッド・セルワギさん (30)、兄ジェームズ・ムレジさん (35) ウガンダ出身》 中：《右から：日本名せいこ (19)、タイ・チュンライ出身、まゆみ (21) バンコク出身、みみ (19)、はるみ (25)、みどり (30)、もも (32)》 右：《アキバ・サデキさん(26)イラン出身》  
〈Living Room, Tokyo [1989-1994]〉より 作家蔵

## III. Picnic [1995-2003]

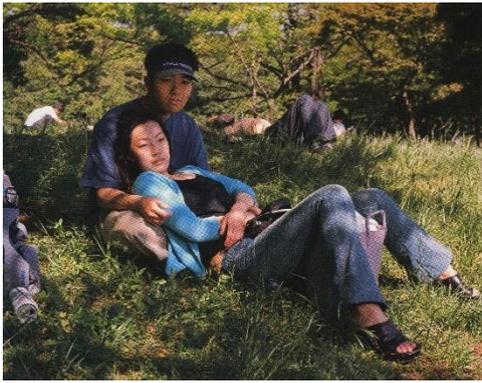
東京の代々木公園や二子玉川の緑地などでレジャーシートを広げ、あるいは草むらに腰をおろし、一緒に時間を過ごしているカップルらを一定の距離感でとらえたシリーズ。

かつて大型カメラで都内の共同住宅に住むアジア人たちを記録した〈Living Room, Tokyo〉同様、レジャーシート上でピクニックを楽しむ彼らは、目に見えない壁に囲まれ、外界から隔絶された二人だけの世界を築きあげているかのようである。

一見、幸せそうな明るい作品群に、瀬戸は次のようなコメントを寄せている。

「消えそうに淡く、そして危ういその瞬間こそが『写真』かもしれません」

濃密であるのと同時に儚げなまなざしの彼らは、屋外という装置を見事に利用した演者のようにも見える。



2点とも 《Picnic [1995-2003]》より 作家蔵

#### IV. Fukushima [1973-2016]

1961年、当時8歳の瀬戸は生まれ育ったタイから父の実家である福島県伊達市に一家で移り住み20歳まで過ごした。タイ東北部のウドンタニ市内で写真館を営んでいた父は故郷でも再び写真館を始め、長男の瀬戸は家業を継ぐために東京の写真学校で学んだが、深瀬昌久や森山大道といった写真家たちとの出会いを重ねるうちに、瀬戸は家業を継ぐのではなく、フリーランスの写真家として生きていく道を選んだ。フリーになって初めて、バンコクからウドンタニ、そして母方の親族が住むハノイへと足を伸ばしたことをきっかけに、それぞれの異なる風土に自身のルーツを見出し、福島の風景を記録するようになった。

2011年3月11日に発生した東日本大震災による津波と福島第一原子力発電所の事故で、東北地方は甚大な被害を受け、福島の大気中にも多くの放射線物質が放出された。肉眼では捉えられない「放射性物質」が地上に舞い降りたことによる恐怖や不安を、福島の雪原や山林、河川の風景に投影した。瀬戸にとってこの事故はあらためて故郷・福島の存在を見つめ直す契機となり、より愛着が深まった故郷を静謐なモノクローム作品として表現した。過去と現在、そして未来へと続く「福島」の姿を、自身の記憶とともに紹介する。



左：《伊達郡国見町》右：《会津若松市》〈Fukushima [1973-2016]〉より 作家蔵

## V. Binran [2004-2007]

「ビンラン」は太平洋・アジア、東アフリカの一部に分布しているヤシ科の植物で、台湾ではもともと先住民の嗜好品であったが、後に移住してきた漢民族にも広がり、いつしか台湾全土で愛用されるようになった。ウズラの卵ほどの大きさの種子に刻みを入れその中に石灰を塗り、キンマと呼ばれるコショウ科の植物の葉でくるむ。一緒に噛むと唾液に混じって真っ赤な汁が口の中に溜まり、それをはき出す。チューインガムのように噛み続けるとのど元が熱くなって、軽い興奮と高揚感が得られる。

台湾郊外では、このビンランの実を売る小さな店「ビンラン・スタンド」を見ることができる。四角いガラスのブースには、格子状にタイルが敷き詰められ、マスコットキャラクターやぬいぐるみが吊るされ、ビンラン売りの女性たちはミニスカートや水着姿など、色とりどりの服装をまとって座っている。瀬戸はネオンを煌々と放つガラスの中で、アンドロイドのような瞳を凍りつかせたまま立ち尽くしているビンラン売りとその光景を、卓抜な感覚で細部まで描写した。ビンラン売りたちは、中国春秋時代の稀代の美女として名高い西施にたとえ「ビンロウ西施」とも呼ばれる。室内に淀む空気感を克明に捉え、その煌びやかさとは裏腹に寂しげな表情を見せる女性たちは、独特の憂愁を漂わせている。



2点とも〈Binran [2004-2007]〉より AKIO NAGASAWA GALLERY 蔵

## VI. Silent Mode 2020 [2019-2020]

瀬戸正人は1996年、カメラの操作音を静粛化させる「サイレントモード」により、電車内の乗客を至近距離で撮影し、その表情や仕草の細部に着目した〈Silent Mode〉シリーズを発表した。目前60センチという最短距離で、音もなくシャッターが切られる。その人の本質的なものがおぼろに現れてくる瞬間を可視化した作品であった。

一方、新作〈Silent Mode 2020〉では被写体の顔にその人の無意識の相が湧き上がってくるのを「待つ」スタイルをとっている。正面からクローズアップされたモデルたちは、室内で数秒程度の露光時間で撮影される。初めのうちは撮影されていることを意識しているが、じっとしたままの姿勢を長時間強いられると、次第にカメラや撮影者の存在を忘れ、自己の内面へ降りてゆくプロセスが表情に現れてくる。髪の毛が揺らいだり、瞬きにより目の縁がブレたり、口元が歪んだりといった偶発的な出来事も起こる。他者から「見られていない」と思っている人間の表情には、「見られている」と自覚しているときには決して現れない表情、つまりもうひとりの自分が表れてくるのである。

人間の表情は不安定で落ちつきがなく、常に気持ちがどこに向いているかに依存している。その人がそ

の人であるということを私たちはどのように認知すべきなのか。本シリーズはそうした人間存在の不思議さや多重性をあらためて浮かび上がらせる。



2点とも  
〈Silent Mode 2020 [2019-  
2020]〉より 作家蔵

## 出品点数

計 105 点

## 展覧会図録

『瀬戸正人写真集 記憶の地図』

デビュー作〈バンコク、ハノイ 1982-1987〉から最新作〈Silent Mode2020〉まで各時代の代表作を収録  
執筆：伊藤俊治（美術史家／東京藝術大学先端芸術表現科教授）、関次和子（東京都写真美術館学芸課長）  
日本カメラ社発行、予定価格 2,970 円（税込）、変形 200mm×215mm、240 ページ

### 巡回情報

本展覧会は福島県立美術館に巡回の予定です。

会期 2021年12月4日—2022年1月30日(予定)

会場 〒960-8003 福島市森合字西養山1番地 福島県立美術館

## 関連イベント

### ドキュメンタリー映画『トオイと正人』上映

1999年に第12回新潮学芸賞を受賞した瀬戸正人の著書を、写真家・小林紀晴が映像化したドキュメンタリー映画『トオイと正人』を上映いたします。

日時 2021年1月10日(日) 10:30-／13:00-／15:30-\*

2021年1月11日(月・祝) 10:30-／13:00-／15:30-\*

\*15:30-の上映終了後、小林紀晴監督、瀬戸正人氏によるアフタートーク(約30分)あり

会場 東京都写真美術館 1階ホール

料金 無料(先着順)

- ・当日午前10:00から、1階ホール受付にて、全ての上映回の整理券を配布いたします。
- ・開場は各上映時間の10分前を予定しています。

#### 『トオイと正人』

旧残留日本兵の父とベトナム系タイ人の母との間にタイに生まれた「トオイ」は、8歳の時に日本に渡り「正人」と呼ばれるようになった。その後、写真家になった28歳の「正人」は、バンコクへ、生まれ故郷のウドンタニへ旅に出る。やがて、「正人」のなかに眠っていた「トオイ」が、静かに目を覚ます。さらに父の記憶を追ってメコン川を渡る。瀬戸正人の著書『トオイと正人』を映画化。タイ、福島でロケを敢行。写真家・小林紀晴による第一回監督作品。

監督・脚本：小林紀晴

原作：瀬戸正人

ナレーション：鶴田真由

出演：瀬戸正人、尾方聖夜

音楽：いろのみ

編集：上野一郎

撮影：小林紀晴、今井知佑、尾崎聖也

2021年／カラー／約60分

監督略歴 小林紀晴 (こばやし・きせい)

1968年長野県生まれ。東京工芸大学短期大学部写真科卒業。新聞社にカメラマンとして入社。1991年独立。20代よりアジアを旅して多く作品を制作。著書に『ASIAN JAPANESE』、『見知らぬ記憶』、『ニッポンの奇祭』、『愛のかたち』など多数。1997年『DAYS ASIA』日本写真協会新人賞、2013年『遠くから来た舟』第22回林忠彦賞を受賞。



# トオイと正人

## 開催概要

# 瀬戸正人 記憶の地図

主催 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／読売新聞社／美術館連絡協議会

特別協賛 東京都写真美術館支援会員

協賛 ライオン／大日本印刷／損保ジャパン／日本テレビ放送網

協力 キヤノンマーケティングジャパン／イルフォード・ジャパン

会期 2020年12月1日（火）－2021年1月24日（日）

会場 東京都写真美術館 2階展示室

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

電話 03-3280-0099 [www.topmuseum.jp](http://www.topmuseum.jp)

開館時間 10:00－18:00 ※入館は閉館の30分前まで

休館日 毎週月曜日（ただし、1月11日（月・祝）は開館、12日（火）は休館）、年末年始（12/29～1/1）

観覧料 一般 700(560)円／学生 560(440)円／中高生・65歳以上 350(280)円（ ）は20名以上の団体  
小学生以下および都内在住・在学の中学生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 1月2日（土）、1月3日（日）  
および1月21日（木・開館記念日）は無料。

※事業はやむを得ない事情により内容を変更する場合がございます。最新情報は当館ホームページをご確認ください。

## このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。広報担当までご連絡ください。

\* 図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。

\* 図版の無断掲載はご遠慮ください。また、トリミング、文字掛け等の加工はできません。

\* 情報確認のため、お手数ですが校正紙を広報担当へお送りください。

## 東京都写真美術館

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

東京都写真美術館 事業企画課 電話 03-3280-0034

展覧会担当：関次和子 [k.sekiji@topmuseum.jp](mailto:k.sekiji@topmuseum.jp)

広報担当 池田良子 平澤 綾乃 岡田なつき [press-info@topmuseum.jp](mailto:press-info@topmuseum.jp)

## 広報用画像



1



2



3



4



5



6



7

1. 〈Bangkok, Hanoi [1982-1987]〉より《バンコク中央駅の裏通り、早朝》 東京都写真美術館蔵
2. 〈Bangkok, Hanoi [1982-1987]〉より《ハノイのホアンキエン地区。ドンスアン市場に通じるメインストリート》 作家蔵
3. 〈Living Room, Tokyo [1989-1994]〉より《手前：ノイナーさん（28）と同居している友人、バンコク出身》 作家蔵
4. 〈Picnic [1995-2003]〉より 作家蔵
5. 〈Fukushima [1973-2016]〉より《会津若松市》 作家蔵
6. 〈Binran [2004-2007]〉より AKIO NAGASAWA GALLERY 蔵
7. 〈Silent Mode 2020 [2019-2020]〉より 作家蔵